セッションが終わり、蓮也は少しぼんやりとしていたが、やがて、ゆっくりと立ち上がった。
確かに、以前と何かが変わったような気がしたが、以前、腕の痺れは残っているし、それが何かはわからなかった。
蓮也のセッションが終わり、次はヘティスのセッションに入る。

ヘティス
「え？私も？私、どこも悪いところないわよ？ゲームやってた時は少し肩こりくらいはあるけど、今はやってないし」
エスメラルダ
「ヘティス、あなたには強いチカラが眠っていて、既にある程度まで開いているわ」
ヘティス
「だから、私、フツー。フツーだってば」
エスメラルダ
「“普通”ってのは“普く通る”と書くのよ。だからスゴいってことなの」
ヘティス
「ん～、その言葉、前にもどこかで聞いたような」
エスメラルダ
「それを見せてあげるわ」

エスメラルダは手をかざし、ヘティスの身体の中央を手でなぞる。すると、ヘティスの正中線が銀色に光り輝く。

ヘティス
「何これ？このシルバーな感覚、前も見たことあるんだけど、見えるというか感じるというか・・・」
エスメラルダ
「これが潜在性エネルギー・クンダリニーよ」
ヘティス
「くんだりにー？」
エスメラルダ
「神典『ロータスートラ』には、仙骨に眠る3回転半トグロを巻く白銀のドラゴンとして説かれているの。それがクンダリニーよ」
「あなたも先ほどの男性と同じね。プロセスが逆だわ。けど、あなたはまだチャクラが殆ど開いていないので、軽いクンダリニー体験をしたのみね。だから健康上、問題はないわ。逆に、身体に負荷がかかるため、人間にはリミッターがかけれれているの」
ヘティス
「りみったー？」
エスメラルダ
「そう、リミッター。例えば、あなたが筋肉から強いチカラを出すとあなたのチカラがあなた自身を壊してしまうし、魔法の場合は脳やメンタルに過度な負担がかかるから、脳やメンタルにダメージを負ってしまう。だから、そうならないように安全装置をつけているの。それがリミッターよ」
ヘティス

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.

「へぇー」
エスメラルダ
「それはいいとして、チャクラは誰もが少しは開いているの。少しでもそれは十分。頭のチャクラが少し開くだけで、普通の人間にはできないような、多くの情報処理が可能となるの。負担がかからない程度にだけど、それを見せてあげるわ」
ヘティス
「ちゃくら？」
エスメラルダ
「そう、チャクラ。人体の中央に７つあるとされる、回転する光の華の形状をしたエネルギーよ。それが開くことが人間の能力・才能の開花なの。誰もが、それを持っているのだけど、全てが開くとは限らない。それを開くのが、さっき話したクンダリニー覚醒よ」
ヘティス
「ん～、色々と聞いたことない言葉が多すぎてわかんないわ」
エスメラルダ
「そうね、あなたは頭でわかるタイプではないから、直接にアチューンメント※で教えてあげるわ」

エスメラルダがヘティスの胸に手をかざすと、ヘティスは暖かく穏やかなエネルギーを感じた。

ヘティス
「エスメラルダさんに手をかざされると、胸が暖かく、穏やかで、自然な感じになるわ」
エスメラルダ
「ヘティス、それが心臓のチャクラ、アナハタチャクラの感覚よ。そして、あなた自身が持つハートの感覚よ」
ヘティス
「あなはたちゃくら・・・はーと」
エスメラルダ
「既にあなたは少し開いているから観えるはずよ」

ヘティスは自分の胸を意識して、その部分を感じてみた。

ヘティス
「緑色に感じる。そして光り輝いていて、蓮のような花弁があって、それが細かく振動しているわ。何これ？これがチャクラなの？」
エスメラルダ
「そう、それが心臓のチャクラ、アナハタチャクラよ」
「色や形や位置は様々だし、人それぞれのところもあるんだけど、基本、グリーンなの。だけど、あなた程美しいグリーンのチャクラは珍しいわ。そして、位置はちょうど中央にあり、形も綺麗。チャクラ学の教科書にあるような、ある意味普通だし、ある意味普遍的なチャクラ。このような美しいグリーンのチャクラは初めて見たわ」
ヘティス
「そうなんだ、だから私、緑が好きなのかな」
エスメラルダ

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.

「そうかもしれないわね。そして、そのグリーンのチャクラからはグリーンのオーラが放たれるの。それがヒーリングでは基本的な穏やかさ、心の平安を作り出すエネルギーになるの」
ヘティス
「けど、エスメラルダさんの手から出てるオーラは白っぽく観えるわ」
エスメラルダ
「これが観えるのは大したものね。高度なヒーリングになると、７つのスペクトル状の光が融合し、白く光り輝くのよ」
ヘティス
「白い光・・・とても綺麗」

エスメラルダは少し沈黙して目を閉じた。
月明かりが部屋に差し込み、ヘティスを照らし出す。

エスメラルダ
「どのような事情であの王子様と一緒か知りませんが、彼のことが好きなんでしょ」
ヘティス
「え・・・？あ、あんな鬱っぽくて、気難しくて、上から目線の奴、好きでもなんでもないわ・・・！」

突然のエスメラルダの質問に、ヘティスは頬を赤らめて少し動揺した。

エスメラルダ
「ヘティス、あなたのハートをもう一度みつめてみて」

ヘティスのグリーンのチャクラがピンクに染まる。

エスメラルダ
「チャクラは正直よ。一般的に、普段のアナハタチャクラはグリーンだけど、恋をするとピンクに変わるの」
ヘティス
「え、何これ、ピンクになってる・・・」
エスメラルダ
「先ほどから観てたのだけど、あなたのそのハートから出るピンクのオーラが彼のハートに向かおうとするの。しかし、彼のハートは岩のように硬く、氷のように冷たく、閉じたままなのよ」
ヘティス
「だって、あいつ、私に興味なさそうなんだもの。てゆーか、恋愛とかに絶対興味ないタイプだわ。戦闘マニアで、女性にはぜんぜん興味ないかもしれないわ」
エスメラルダ
「わからないけど、そうとは限らないわ。けど、脈がなければオーラは向かおうとしないはず。物事に縁がある時、その原因があるはず。縁結びの法則ね。これを因縁、ニダーナと言うの。ヒーラーがクライアントにヒーリングを施すのも、これがないとできないわ」
ヘティス
「そうなんだ」

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.

エスメラルダ
「ヘティス、彼が好きだったら、彼の役に立ちたいでしょ？」
ヘティス
「そりゃ、そうだけど、囮役とか嫌」
エスメラルダ
「だったら、ヒーラーにおなりなさい」
ヘティス
「え？私がヒーラーに？無理よ、無理。だって私、フツーだもの」
エスメラルダ
「あなたにはヒーラーになる十分な才能があるわ、だって、素晴らしいグリーンハートがあるもの。そして、人を愛する心があるし、動物や自然を愛する心がある。あなたのお連れのワンちゃん、ネコちゃんのエネルギー的な繋がりを見ればよくわかるわ。ヒーラーはその延長よ。ヒーリングとは、小さな愛、小さな光からの広がり、延長なの」

エスメラルダの話を聴いてヘティスの心に「小さな光」が灯ったような気がした。

【楽曲『小さな光』】
https://youtu.be/6yZWOqMab00

ヘティスは、その感覚に対し、両手を胸に当て、目を閉じた。
その様子をエスメラルダは見守っていた。
穏やかな月明かりが窓から入り、ヘティスを映し出す。
しばらくしてからヘティスは目を開けた。
今度は目を爛々とさせ、エスメラルダに質問する。

ヘティス
「じゃあ、エスメラルダさんは、愛する人のためにヒーラーになったの？」
エスメラルダ
「そうね、私も若い頃があって、好きな人がいて、その人のためにヒーラーになった」
ヘティス
「え、そうなの？お話、聞きたいわ！」

更にヘティスの目は爛々とする。

エスメラルダ
「そうね、私がある戦いで傷つき、生命が半分尽きかけていてね。ほぼ諦めて倒れていたの」
「そこに、ある男性が突如現れて、リザレクションしてくれたの」
ヘティス
「りざれくしょん？」
エスメラルダ
「リザレクションとは、復活魔法よ。ヒーリングは、怪我や病気の治療が基本なの。瀕死の状態で命が尽きかけている場合、ヒーリングではなくリザレクションを使うの。リザレクションはヒーラーでも、かなりレベルが高くないとできない高級魔法よ。しかも、リザ

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.

レクションは、そのヒーラーの命を削って行われるサクリファイス・自己犠牲の魔法なの」
「その男性に私は命を頂いた。そして、その人から無償の愛を感じたの。だから、その人のためにヒーラーとして生きよう、これが私のベルーフだ、そう思った。それと同時に、気付いたら、その人のことを好きになっていたわ。けど、その人の役に立てたかどうかはわからない。何せ、彼はヒーリングだけでなく攻撃魔法も使いこなすレベルの人だったし、既に英雄として崇められていて、私が近寄れるような存在ではなくて」
ヘティス
「それで、エスメラルダさんは、どうしたの？」
エスメラルダ
「思いを伝えようと常に思っていたんだけどね、ある日、突然、消えてしまった」
ヘティス
「それで、それで！今もその人のことを？」
エスメラルダ
「ええ、そうね。今もあの時と同じ想いよ」
ヘティス
「で、その後どうなったの？」
エスメラルダ
「そうね、その人のことを、その後も思い続けてしまい・・・お陰様で、ずっと、この歳まで独り身よ」
ヘティス
「そんな～！なんで神様は人生をハッピーエンドにしてくれないのぉ」
「けどさ、けどさ、今も想い続けてるんでしょ？素敵～！」
エスメラルダ
「そうね。だから、ヘティス、あなたにはそうなって欲しくないから、“想い”は放てる時に放つのよ。ハナツオモイ、これを忘れないことね」
ヘティス
「ハナツオモイ・・・」
エスメラルダ
「ハナツオモイ、よ」
ヘティス
「で、どんな名前の人？」
エスメラルダ
「出自、経歴が不明だったわ。いつも蒼のローブを身に纏っていたことから、“蒼き魔術師”と言われていた。名は“ソーマ”」※
ヘティス
「蒼き魔術師・ソーマ・・・覚えておくわ！」
エスメラルダ
「そんなの聞いてどうするの？」
ヘティス
「私が、その蒼き魔術師を探してあげるわ！私ね、運とてもいいのよ。だって、蓮也と会いたいと思ったら、ピンポイントですぐに出会ったわ。だから蒼き魔術師もすぐに出会いそう」
エスメラルダ

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.

「あなたには、そうした不思議なチカラがあるのかもね。ただ、あれから誰も蒼き魔術師を見ていないし、年齢も高齢になっていると思うから。けど、どこかで生きててほしいわ」
ヘティス
「彼を想い続けて、何十年越しの愛、素敵〜！」
エスメラルダ
「それはいいとして、彼の治療にはあなたの想いも必要かもしれない、そう感じたの。まあ、ヘティス、あなたがヒーラーになる、ならないはあなたの自由。けど、彼を癒し、ヒーラーになりたいと思うんだったら、また、明日いらっしゃい」
ヘティス
「わかったわ、今日、一晩考えてみる」

※アチューンメントとは、調和・適合・同調という意味。ヒーラーがクライエントと繋がり回路を開くことを意味する。
※蒼き魔術師は、魔王サトゥルヌスを封印した伝説の五行英雄の一人。殆どの属性の魔術を習得した天才的な大魔術師。魔王サトゥルヌスを封印したのか蒼き魔術師の力である。

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.